講演

「現代の保育制度変革の中で起こっていること」

第三回 お茶の水女子大学ECCELL子ども学シンポジウム
(二〇一一年十二月十八日) から

渡辺英則
(構成/浜口順子)

子どもによって保育料が違うし、申請書類も違う。監査も別だし、入園の仕方も違えば卒園証書も違う。現場からするとかなり大変な違いだと感じています。
今は、子ども・子育て新システム検討会議作業グループの、こども指針(仮称)ワーキングチームに入っています。会議に出て感じたことですが、総論では待機児対策とか、女性が働いてくれれば年金も税金も助かる、みたいな話に傾いていないか。その中で子どもや保護者が孤立していることや、子どもの危機を直接受け止めている現場の先生たちの悩みとかが十分考えられているのか。親の就労時間を長くし

幼保一体化の波の中で

港北幼稚園と ゆうゆうのもり幼保園という認定こども園の園長をしております渡辺です。横浜市は、平成十五年に子育て支援事業本部を立ち上げ、三年間で保育園の定員を八千人増やすといって毎年四十ぐらい保育園を作るという待機児童対策の真っただ中で、幼保一体化施設を公募しました。社会福祉法人を設立し、幼保一体化施設を平成十七年に立ち上げました。
認定こども園では、保育園の子もいれば、幼稚園の短時間の子、幼稚園の預かり保育利用の子もいて、

て対応するといっても、ゆうゆうのもり幼保園で閉園時間の七時半を過ぎて迎えに来たお母さんに、「保育時間が八時まで延びたら楽になる?」と聞いても、「いや、先生、今七時四〇分とかに帰ってきて園に迷惑かけているけど、これが八時になって、家で九時に子どもとご飯食べて、翌朝また七時ごろ家を出てこなきゃいけないってことになる。そうしたら私の生活は破綻します」と言う人がいました。本当にこのような長時間子どもを預ける施策が増えていっていいのか? それを続けるの? と思っています。

子どもが本当に育つということは

今、横浜市の公立の保育園ではブランコの下にプランターを置いておくところが多いです。たぶん今、幼稚園や保育園で困っているのは、けがや子ども同士のトラブルと、保護者から園へ寄せられる苦情の処理です。

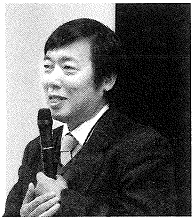
苦情などのトラブルが起こらないことを優先してしまう。でも危ないことをすべて避けていて、子どもが本当に育つのでしょうか。

入園説明会の場で、「公園でブランコに乗っていて、他の子が乗りたそうにしていたらどうしますか?」と聞くと、八、九割の保護者は「代わってあげなさいと言います」と言う。でも僕らが育てたいのは、「僕はずーっと待っていたからもうちょっと乗りたい」とか「小さい子が来たから代わってあげよう」というような、自分で判断できる子どもです。「ブランコは二十数えたら交代ね」とか「滑り台の逆さ登りはだめね」とか、園でルールを作れば確かにトラブルはなくなるかもしれない。でも、園を離れて、いろいろな子どもたちが公園に来た時に、自分たちで話し合う力がなかったら上手に遊べないわけです。

『ガンピーさんのふなあそび』(ジョン・バーニンガム作　光吉夏弥訳　ほるぷ出版)という絵本があります。ガンピーさんというおじさんの舟に、子どもたちや犬やヤギなどの動物が次々に乗り込んでくる。舟の上で子どもたちはけんかしたり、ニワトリは羽をパタパタやったり、ヤギはメーメー鳴いたり、

牛はのしのし歩き回ったり、やらなければいいことを全部やって、舟はひっくり返ってしまう。乗っている動物と子どもたちはずぶぬれになるが、洋服を乾かして、土手を歩いてガンピーさんの家に行って、お茶を飲んで帰ります。ガンピーさんは「ほら言ったじゃないか」とか「ちゃんと注意したぞ」ではなく、「また乗りにおいで」と子どもたちを帰す。失敗した経験があるから、次に乗る時はもうちょっと自分たちでどうしたらいいか考えるはずです。子どもはけんかするから子どもであり、ニワトリは羽をパタパタやるからニワトリなのです。それを禁止してしまうということは個性を失うということです。幼稚園や保育園でも、それぞれの子が自分を出し、周りとも多少のトラブルを起こしながら、でもそこでどうしたらいいかを子どもたちが学んでいく。それが保育園や幼稚園の役割ですよって言うには、すごくいい本だと思う。

　保護者の、「子どもを預かってもらえばいい」という意識からどうやって脱却するかが問われています。長時間保育になればなるほど、離乳もおむつを外すことも保育園に任せますっていう話になりやすい。これで本当にいいのかどうか。親が忙しいと、子どもの気持ちを受け止められないで、「あんた何ぐずぐずしてるの」と子どもを振り回すこともある。また、親同士の関係が厳しいと、「先生たちが見ていてくれなかったからトラブルになった。ちゃんと見ていてくれ」というような苦情になる。本来的には、親同士が親しくなっていたら、「昨日ごめんね、たたいちゃったみたい」「いいのよ、お互い様だから」というような話で済むことでも、園は管理的にならざるを得ず、子どもの生活を狭めてしまうことになる。苦情が出ないように保育をしろとか、やみくもに第三者評価を受けるなどの指導があったりとかすると、子どもたちの長時間の生活は（適切な表現かわからないけれど）収容所化されていき、けがさせないとかけんかさせないとかにすごくエネルギーを使って保育をしてい



くことになりかねない。それで本当に子どもは幸せなのでしょうか。

保育園に直接契約が導入され、企業がさらに参入してくるようになると、体操や絵画を指導します、長時間でも預かります、一日中英語で過ごします、というような、いろいろな園が出てきます。そうなると、それに対抗するような幼稚園とか保育園も出てくる。「預かる」という流れと、「小学校へのスムーズな接続」という流れの中で、幼稚園や保育園の保育の本質的なところが狭められていくような感じがあります。実際、子どもは遊びの中で育っていくということをどうやって保育関係者、保護者、そして小学校の関係者などに理解してもらうか、そこが問われています。

「子育てが大変だったら、うちでちょっと見てあげるよ」とか、「一緒に夕飯食べない?」など、地域の中で子どもたちが育っていく関係をどうつくっていくかということを考えないと、子どもは育っていかないのではないかという感じがしています。

保育時間のデザイン

認定こども園の保育を考える上で、九時から二時までの時間はやはり大事だと思っています。保育園的な子もそこには来てほしい。総合施設化の中で、子どもを預かる総時間数を決めて、夜だけ来る子がいるとか、朝だけ来る子がいるとか、土日に来る子がいるとか、子どもを預かる時間を保護者が勝手に決めるようになったら、子どもの集団性はズタズタになってきてしまうでしょう。九時から二時までの幼稚園的な時間をどうするか。その一方で、長時間保育の子どものほうが育つとしたら幼稚園的な子はどうするのか、という疑問も起こる。今、早く家に帰っても遊ぶ友達や祖父母もいなくて、家に一人でいるよりは園にいたほうがいい、というような問題も、秋田の方では起こっています。

どのような保育を組み立てるのかを考えなくてはなりません。土曜日の行事が多かったりすると、保育者の働き方もたぶん違ってきてしまって、これも

難しい。新人の先生が多くなって結構忙しくなると、丁寧に保育を振り返らずに、何とか無事に保育を終わらせるような日々になってきてしまうだろうし、ちょっとしたけんかやけががあったといっても、誰がどこでどういうふうにそうなったのか、二時で帰る幼稚園児がたくさんいる場合、長時間担当と短時間担当の保育者との連携が難しくなる。横浜で比較的多い認定こども園の形は、幼保の施設がお互いに独立していて、幼稚園がある時間帯だけ、保育園の子が幼稚園に行き、また保育園に帰る、というもので、このほうが運営しやすいです。

ゆうゆうのもり幼保園での保育の流れ

朝、保育園に登園し、九時ぐらいになったら幼稚園に行って、二時ごろまた保育園に帰るという、家庭の補完的な形で保育園を活用していくと、割とうまくいきます。二つの建物が独立してあって、こっちはあくまで保育園、別の建物はあくまで幼稚園っていう枠を守るからです。保育園の先生たちは、例えば夏休みとかに幼稚園の先生が手伝ってくれると私たちも楽だわ、って感じるし、幼稚園の先生たちは、保育中、子どもの人数は増えるけど保育園の先生がフリーで入ってくれるから助かるというような関係ができます。ただし、このような認定こども園は、あくまでも幼稚園と保育園が独立してあるということが原則です。

子どもの側から考えていった時にはどうか。ゆうゆうのもり幼保園では、九時から二時を「光の時間」、それ以降を「風の時間」と名付けて分けています。その前後、九時前は「おはよう保育」、夕方五時か六時以降は「ぬくもりの時間」と呼び、ここは子どもの数が少なくなるので、より家庭的な雰囲気を大事にしようと思っています。幼稚園が四時間とか五時間という保育時間なのは、家庭や地域に子どもの居場所があって、帰宅後に子どもたちなりの生活が保障されていたからです。それが今はできなくなってきている。それなら園の中にそういう地域的な生活をつくろうというのが「風の時間」です。

この写真（省略）は二歳児が流しそうめんをしているところ。もともとはおやじの会がやっていた流しそうめんが、保育の中に入ってきて、食べることが楽しくなる。三歳児以上が遊びの中で育っていくという場合、例えば小さな集団が楽しい遊びをしていると、徐々に大きな集団になっていったりすることがあります。昨年ですが、年長の子どもたちがケーキを作っていたら、乳児の子たちが来て一緒になってケーキ屋さんをやったりもする。楽しいことが起こっているとそこに乳児も保護者も寄ってきて、子どもたち同士が育ち合うことをどう実現していくかが大事なんだろうと思います。

風の時間の中では、小学生ボランティアが下校途中にランドセルのまま園に来ます。お母さんに園から自分で「今からボランティアやる」って電話をして、ドッジボールしたりセミを捕まえてくれたりして、お兄ちゃんお姉ちゃんとしてのカッコよさを見せてくれる。お母さんたちもボランティアでおやつを手作りしてくれたり、絵本を読んでくれたりしてかかわってくると、地域が園の中につくられていくことになる。今年一番の人気は、いわゆる「森の幼稚園」をまねて、風の時間担当の先生たちが毎日近くの森に行って、いろいろな遊びの経験をしたことです。がけ登りで五歳児が一生懸命、三歳の子たちと手をつないで面倒見てあげていたりしました。

保護者のあり方について

昨年、ゆうゆうのもりのお父さんの知り合いが、田んぼを貸してくれました。それで親父の会みんなで行ったら、お父さんお母さんのほうがワクワクしていて、子どもはみんなドロドロになりたくないって嫌がっていた。でも大人が面白いからって結局みんなで入って、泥をかけ合って記念写真撮りました。田植えをして、稲刈りをして。素朴ですけど、そんなことが本当は子育ての中で大事だっていうメッセージを出すことが必要だろうなって思っているんです。

幼保で保育料が違う中で、ゆうゆうのもりでは、二歳までがずっと保育園で来て、三歳になると、幼

稚園の人たちがそこから五十人くらい入ってくる。全部で六十人ぐらいが一緒になると、何かあるたびに「私たちは保育園です」「私たちは幼稚園です」という話になりやすい。この幼保の壁が、僕の中では七年ぐらいやってきた中で結構難しかった。その壁をそのままにしていくと、小学校に入った時に小学校の先生も大変だろうと思います。幼稚園と保育園という違いを強調するのではなく、ゆうゆうのもりの子どもとして育つとか、地域の子どもとして育つとか、そういう大人の意識とか協同性を大事にしないと、なかなか子どもが育っていく環境はできてこないだろうという気がしています。

保護者には、働いていようがいまいが、参観で見に来るだけでなく、保育に参加してもらうよう伝えています。園を開く中で、子どもや保育への理解を深めてもらうことが、本当はこれからの評価だろうと思います。子どもを通して、大人も、自分の世界や生き方が広がっていく。その楽しさを感じたり、地域の中で子どもたちみんなが育っていくということを考えていこうとすることが、本来的には子育て支援としての総合施設の役割だろうと思っています。

最後に、家庭で子育てする選択をしたお母さんたちのことも、もっと社会は大事にしてほしいです。この前、専業主婦のお母さんが、市から月に七千円出ていた赤ちゃん会の運営費が減らされるか無くされるって話をしていました。その一方で、0歳児のお母さんが保育園を選択した場合、運営費などの経費が月四十万円以上かかる。待機児対策というのは、保育園を作り続けることだけじゃなくて、0・一・二歳児の親たちのいろいろな要望に対しても丁寧に受け止めないと本当はおかしい。地域の中で子育てをしていることは損だ、というイメージが出来てきているような感じもあります。子どもが小さい時は家で育てたいと思う人や、子どもが小学校に入ったら働きたいと思う人が、そのことを実現できるようなトータルで子育てを考えられる仕組みを考えなければ真の子育て支援ではないと思います。

（横浜市 港北幼稚園・ゆうゆうのもり幼保園）